

元田永孚の「弗蘭克林十二徳」補註と漢詩

所

功

はじめに

元田永孚（一八一八〜九一）といえ、^①「明治天皇の側近にあつて儒学を講じ……儒教主義による国民教化に尽力し、教学大旨・幼学綱要を執筆、明治二十三年（一八九〇）教育勅語の草案を作成した」ことなどが、主な事績としてあげられる。

ただ、明治維新前後に欧米の文物が流布したことは申すまでもないが、それを活用した一例として「元田永孚は明治皇后にフランクリンの自伝を進講した」ことは、必ずしも広く知られていない。この記述は少し不正確である（注9参照）が、元田により「フランクリンの自伝」の一部が「明治皇后」（昭憲皇太后）に伝えられたことは間違いない。

では、儒学担当の侍講であつた元田が、どうしてベンジャミン・フランクリンの『自伝』を知り、どのように受けとめたのか、またどんな内容をどのようにして皇后に伝えたのか、その真相は未だ必ずしも明確になっていない。

ところで私は、全くの門外漢ながら、百二十年前に渙発された「教育勅語」について関心があり、その成立前史を調べうるうちに、元田の功績のひとつとされる右の一件が気懸りとなつた。そこで昨年来、関係のありそうな資料を探し、

僅かながら新知見をえた。まだ解けない疑問も少なくないが、今回とりあえず元田自筆の未刊資料と関連資料を紹介して、博雅の御示教を仰ぎたい。

註 (1) 日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(昭和五十六年、吉川弘文館) 一〇〇一―二頁。詳伝は海後宗臣氏『元田永孚』(昭和十七年、文教書院) など参照。

(2) 佐渡谷重信氏『アメリカ精神と日本文明』(初版昭和五十一年、潮新書。平成二年、講談社学術文庫) 文庫二七頁。

一 フランクリンの『自伝』と「十二徳」

B・フランクリン(一七〇六―九〇)の『自伝』(Autobiography)ただ本人の原稿はmemories)は、あまりにも有名なロング・セラーであるが、その成立と普及には複雑な事情が絡まっている。それを松本慎一・西川正身両氏の解説⁽³⁾により、ごく簡単に振り返っておこう。

著者の草稿は、本書冒頭に記すとおり、一七七一年(六十五歳)イギリス滞在中、息子ウィリアム・フランクリンのために書き始められた。しかし、五年後のアメリカ独立に全力を尽くすため中断し、一七八四年(七十八歳)フランス滞在中に書き継ぎ、その後再三中絶しながら書き続けたが、一七九〇年(八十四歳)未完のまま終わった。

その間に原稿の写しがヨーロッパの友人に送られており、それに基づいて、まずa)一七九一年、パリでフランス語訳の『自伝』が出版された(ビュイソン版。他にル・ヴェイヤール訳もある)。ついでb)一七九三年、その英訳(ロビンソン版)がロンドンで刊行されてから、このb)がアメリカでも普及した。

しかし、やがてc)一八一七年、著者の孫ウィリアム・テンブル・フランクリンが、祖父の原文によって全集を編集

し、ロンドンで出版した（ウィリアム版）。それを受け継いで④一八四〇年、ハーバード大学のジャレッド・スパークスが全集を完成させ、そのなかに『自伝』（スパークス版）を収めた。しかも、さらに⑤一八六八年、ジョン・ビグローが、パリで入手した⑥とは別の原稿に基づいて全集を編纂し直し、その第一巻に『自伝』（ビグロー版）を収めている。

このうち、最も普及したのは④スパークス版である。とりわけ明治時代の日本に輸入され、同十年代から段々普及した和訳刊本は、スパークス版を底本としている。⁽⁴⁾

ただ、この『自伝』は、その全文が日本へ入ってくる前から、その要点を紹介したり、第六章の「十三徳」（むしろ十二徳）部分だけを抄出し編纂した書物が、さまざまな形で伝来していた。それが本稿では重要な意味をもつため、そのいきさつを少し詳しく見ておこう。

佐渡谷重信氏（注2）の指摘されるとおり、文久年間（一八六一〜四）に出版された^{みづくりげんぼ}箕作阮甫編『玉石志林』に「合衆国ベンヤミン・フランクリンの略伝」が紹介されている（『明治文化全集』一六卷〈昭和三年、日本評論社〉所収六七〜九頁）。また平川祐弘氏によれば、⁽⁵⁾慶応二年（一八六六）イギリスへ留学した中村正直は、同四年（明治元年）帰国のさい入手したサミュエル・スマイルズ著“Self Help”（初版一八五九年、改版一八六七年）を翻訳し、明治三年（一八七〇）『西国立志編』の題で出版した。その第十二編「儀範〔又曰く典型〕を論ず」に、「富蘭克林の著述に遺せる儀範」が後の人に与えた影響を評価している（富山房百科文庫一八〈昭和十三年、富山房〉所収三六〇頁）。

しかも、その「儀範」内容を含む道德教科書を翻訳出版したのは、箕作麟祥（阮甫の養子省吾の長男）である。彼は慶応三年（一八六七）二十二歳でフランスへ留学し、翌年（明治元年）帰国して新政府の翻訳官（同六年、翻訳局長）となり、『万国政体論』（明治八年）『仏国民法解釈』（同十年）などを著わし、明六社の一員としても活躍する。⁽⁶⁾

この麟祥が、留学中に入手した「法蘭西国学士ボンヌ氏の著述にして、千八百六十七年（慶応三年）⁽⁷⁾巴勒にて刊行せる……小学校にて児童を教ふるが為め作りしもの」を翻訳し、『泰西勸善訓蒙』と題して出版した。本書は上中下三巻から成る。その篇目は、

- 一、勸善学の大旨
- 二、天に対する務
- 三、自己に対する務
- 四、人に対する務
- 五、族人に対する務
- 六、国に対する務

に分けられ、六の末尾「徳に進むの法」の中に「フランクリンの教誨」として、次のごとく記されている。

メリケン^{メリケン}の「フランクリン」と云へる人は、電気^{エレキトル}及び避雷柱^{らいびきちゆう}等の大発明を為したる学士にして、初めは印書家^{かつしばんし}の士夫なりしが、次に記する所の方法を用ひ、其の過失を改めて勸善の徳に進むを得、終に米国^{メリケン}の高名なる官長となり、其の名を世に顯はすに至れり。

○「フランクリン」は、徳を分ちて十二となし、簡略なる註釈を加へて之を簿冊の巻首に記し、日々其の簿冊を見る毎に心を留め、其の十二徳の中一として怠ることなく……自から警めたり。……今の世にある少年輩も「フランクリン」の規模^{てま}を慕ひ、所謂十二の徳を心に銘じ、日々勉励して之を行ふ時は、終に徳の習を得るに至る可し。因て十二の徳を左に記列す。

- 第一 節制 積して曰く、昏迷するに至る迄 飽^{おほのみく} 饒^いすること勿れ。
- 第二 沈黙 積して曰く、己に益あり、又は人に益ある事に非れば、云ふこと勿れ。
- 第三 順序 積して曰く、事物に皆次第を定め、事を行ふに各々順序を以てす可し。
- 第四 確志 積して曰く、己の為す可き事は必ず之を為すを決し、一旦決したる所は必ず之を遂ぐ可し。
- 第五 節儉 積して曰く、己の為め人の為め、財を有益の事のみに用ひ、必ず之を無益に費すこと勿れ。

第六 勤勞 積して曰く、光陰を無益に過すことなく、常に必ず有益の事を勉む可し。

第七 誠実 積して曰く、人を欺くことなく、意志・言詞共に誠を以てす可し。

第八 公義 積して曰く、人に損害を加ふることなく、人の恩は必ず之に報ゆ可し。

第九 温和 積して曰く、性情の度に過ぐるを防ぎ、人を恨むの念を制止す可し。

第十 清潔 積して曰く、衣服・身体・家屋を不潔になすこと勿れ。

第十一 寧靜 積して曰く、小事を以て軽率に心を動すこと勿れ。

第十二 謙遜 積して曰く、人に対し驕傲なること勿れ。

これによれば、箕作麟祥は留学中にフランクリンの『自伝』を見ているかもしれないが、これはボンヌ著の児童用教科書を翻訳したものであり、その棹尾に引載されているのが「フランクリンの十二徳」にほかならない。しかも、それが当時（明治四年）教育関係者などに広まったものとみられる。

註(3) 松本慎一・西川正身両氏訳『フランクリン自伝』（初版、昭和十二年。改訳、同三十一年。共に岩波文庫）改訳解説三〇一〜七頁。西川氏の同「あとがき」三〇九〜三四頁。この初版はビグロー版、改訳はアルバート・スマイズ編『フランクリン著作集』（一九〇五〜七年刊）所収『自伝』を底本としている。他にマックス・ファランド編『フランクリンの自伝』（一九四九年）もある。

(4) 注(2)(3)によれば、山田邦彦訳『仏蘭克林 金言言行録』（明治十七年）、御手洗正和訳『名華之余薫』（同二十一年）、望月與三郎訳『勤勉立志富蘭克林自叙伝』（同二十二年）、国木田独歩『フランクリンの少年時代』（同二十九年）、佐久間信恭訳『フランクリンの自伝』（同三十一年）、笹山準一著『立志成功新訳フランクリン』（同四十三年）、竹村修訳『フランクリン自叙伝』（大正初年）、百島操『フランクリン一代記』（大正初年）、中里介山『フランクリン言行録』（昭和十年）、金井朋和訳『フランクリン自叙伝』（昭和十一年）などもある。

(5) 平川祐弘氏『東の橋 西のオレンジ』（昭和五十六年、文藝春秋）五三〜七四頁。文中引用の中村正直『西国立志編』（同年、講談社学術文庫）に、「サミュエル・ドリフは、その一生、職事に勉強すること、慣れて性となりたるは、フランクリンの著述（自伝）に遺せる儀範を師として学びしに由れり、といへり。かく、好儀範の将来に伝はること、何ぞ底極まる（いんぎく）ところあらんや。」と推奨している。（原文の片仮名を人名以外は平仮名に直した。以下同）。

(6) 注（1）『明治維新人名辞典』九六二頁、詳しくは大槻文彦『箕作麟祥君伝』（明治四〇年）など参照。

なお、本稿の校正中（十一月下旬）、本学文化学部の小倉恵美准教授と出会い初めて知ったことであるが、同氏は一橋大学大学院の平成九年度修士論文『文字の人 フランクリン―近代アメリカ、そして近代日本におけるフランクリンの受容―』（複写受贈）の中で、つとに亀井俊介氏『ベンジャミン・フランクリン』（研究社アメリカ古典文庫1、昭和五十年）の解説によれば、箕作省吾（麟祥の父）が弘化二年（一八四五）『坤輿図識』にフランクリンを簡略に紹介していること、また今井輝子氏「日本におけるフランクリンの受容―明治時代―」（『津田塾大学紀要』第一四号）によれば、小幡篤次郎が明治元年（一八六八）『天変地異』の中に、フランクリンを科学者（避雷針の発明者）として紹介していること、さらに福沢諭吉が翻訳したチェンバースの児童用道德書『童蒙教草』（明治五年刊、日本教科書大系所収）に、「フランクリンの遺文」として「働と儉約とを守れば成らざる事なし」などを紹介していること、などを指摘されている。

(7) 本書は何種類も版行されている。私が見た版本は「明治四年辛未仲秋刊行」の「名古屋学校蔵版」本である。

二 元田永孚と「弗蘭克林十二徳」

この『泰西勸善訓蒙』が出版された明治四年（一八七〇）、宮内省に出仕したのが、熊本出身の元田永孚（五十三歳）である。彼は肥後藩の時習館で居寮生となり、居寮長の横井小楠から影響を受け、実学党の結成にも参加した（注1参照）。しかし、それ以上に漢詩文・儒学を究めていたので、宮内省では明治八年から天皇の侍講に任じられ、長く儒学を進講している。

その元田に関する資料の大部分は、遺族から国立国会図書館に寄贈され、マイクロフィルムでも閲覧することができる。⁽⁸⁾ それを通覧したところ、「上奏建言草稿」を綴り合せた文書（マイクロフィルム第七卷一〇七—一七—チ）の中に、次のような草稿が含まれている。年次は記されていないが、その前に明治七年八月付の「聖徳」を論じた建言、後に明治五年六月付の「上三三條公書」が貼り継がれているから、おそらくその間（明治五年—七年）に書かれたものとみて大過ないであろう。ただ、全体に訂正箇所が多く、初稿は五年以前に作られた可能性もある。

以下、片仮名は平仮名に改めて翻刻する。元田自身が原文を訂正して行の左右に記した文字は、元字の下のへ内に入れる。草稿にある左脇の傍点は消された文字、また右脇の下・上は位置の置き換えを示す。ただ二ヶ所の傍線と各一の右側算用数字は筆者が加えた。

弗蘭克林十二徳の註釈、簡にして尽せり。然れども初（後）学之を習ふ、或は約に失して着手に難く、或は位次混（無く）して要を得るに苦しむ。故に今、臆見を付して○（位次を分ち）之○（が註釈）を補し、自省みへに、亦以て（備ふ（便す）と云、初学に示すこと、左の如し。

一、¹ 節制 原書原注を加ふ。

身を修むるは欲を節するより始まる。口腹はへに（飲食にへに）過ぎ、耳口はへに（嗜好にへに）過ぎ、身体はへに（安逸にへに）過ぎ、情意はへに（欲楽にへに）過ぎ易し。其初（九）そ欲は八分に過ぎず、事は八分を過ぎず、餘地を留むべし（僅に一二分の間にありへのみ）○（頭注「事は八分を過ぎ、須らく餘地を残すべし」）。故に先づ規度を定め、初めに意念を制し○（一）飲一食必ず八分を過ぎず、一遊一楽必ず餘地を留む、己に克て礼に復らんことを要す。

一、² 清潔

外を整ふるは内を養ふ所以。故に○〈常に〉肌膚を清潔に〈洗滌〉し、衣服を淨理し、閨房を○〈除〉整正し、堂宇を洒掃し、門庭を爽快にし○〈凡て〉人の見ざる處に心を用て〈注意〉し、務て不潔を去れば、空〈正〉氣暢達して、精神常に剛健なり○〈充滿〉〈実〉す〉。

一³ 勤 勞

業は勤を以て成り、功は勞に由て大なり。安富尊榮は勤勞の花実、一日勤めざれば千日の効を遅くし○〈失ひ〉、一事勞せざれば、百事の用に後へを愆る。百年の事業は、一寸の光陰より始まる。勤めざるべけんや、勞せざるべけんや。

一⁴ 沈 黙

言語は榮辱の枢機、慎まざるべからず。第一、朝廷の闕失を言はず、○〈第二〉人の過惡を言はず、○〈第三〉己が勞苦を言はず、○〈第四〉愉快に乗じて語らず、○〈第五〉怒氣に激して語らず、一言を發する、必○〈心の〉虚実を顧み、一事を述る、必○〈言の〉到底を慮るへり、○〈多言に過んよりは寧ろ沈黙するに如ず。〉

右、修養の要。

一⁵ 確 志

一たび道に志しては、其志を堅守し、富貴に淫せず貪賤に移らず、威武に屈せず、忍ぶべからざるを忍び、耐がたきに耐多、剛健強毅、必共道を行ひ、己が及ばざる所は、百世以て聖人を俟ち、斃て息まず。

一⁶ 誠 実

誠は人心の宝、万事の根。誠無れば物なし。故に迷暗独知の地も自欺くの念なく、顯明稠人の中も、己を飾るの意なく、天をも怨みず、人をも尤めず、動靜語黙、唯神明と相對して愧ることなければ、○〈本心常に〉惻怛懇到、

自己^やむこと能はず。

一、⁷ 温和

慈愛なければ心自温に、楽易なれば氣自ら和す。温和は天理人道の至順。温和なれば事皆悖らず、物自然に混化す。夫婦の和、父子の愛、是天理自然の至順〈情〉なり、但、君上には敬に失し〈過ぎ〉易く、卑賤に臨むには敵急に失し〈過ぎ〉易し、或は忿疾に失〈激〉し、或は驕夸に奪はれて、天然の温和を失ふ。善く慈愛の本心を培養拡充すれば、自然に温和なり。

一、⁸ 謙遜

志小なれば心満つ、心満れば氣驕る。善に伐り勞を施にする。皆志の小なるに基くなり。只能く上帝の心を心としへに溯り、聖を以て自期する時は、心満つることなく、○〈賢者は敬ひ〉其学〈業〉の進むに従ひ、○〈益々其〉道の窮りなきを○〈楽しんで〉悟り、其業の大なるに従ひ、作用の限りなきを知り、○〈其心〉益々謙遜にして、自矜り人に傲るの念あることなし。

右、存心の要。

一、⁹ 順序

物、本末あり。事、終始あり。終を先にし始を終にすべからず。末を急にし、本を緩にすべからず。心に正してすることなく、忘ることなく、助長することなく、泉の滾々昼夜を捨ず、舎に允て〈科に盈て〉進み、遂に四海に達する〈放る〉が如く、鑿智を用ひず、捷徑に由らず、○〈四時運行するが如く〉、序に順て無為なり。

一、¹⁰ 節儉

貨財は天下の有〈遍〉用、吾一人の資本は、万人〈民〉の一部分なり。○〈吾人の利益を通ず。蓋天下の財は〉己

無益に費せば、節せざれば、人亦無益に之を取る、吾を益せず、己不義に与れば、人亦不義に之を受く、吾を愛する所以、天下の用は義と有益とのみ。○己れ一人の有に非ず。但、天下の財は限り有て、一人の欲は窮りなし。一人を節すれば、天下一分の用を利す。故に一出の錢も必人の益を謀り、一人の貨も必己の義を思ふ。何か吝み何をか奢らん。節儉は只義に従ふ、礼に通ずるのみ。

一、
寧靜

輕躁なれば心地定まらずして举措へ止、道に中らず。何を以て天下の理を究め、天下の事へ務を慮らんや。故に○事に臨むの初、大事の処し難きに遇ふと雖、○頭注「理を以て」に克ち、成敗□心を動かす□無かるべし。先づ心を平にし、氣を鎮め、安靜にして理の当然を見るべし。孔明、陣に臨て○綸巾羽扇を把り、安車に乗りて意思安閑、拿破倫軍に仕て、学校の事を規画するが如し、是皆真に寧靜の至る処なり。

一、
公義

孤兒・寡婦の欺き易きも欺くことなく、高祿・重爵の辞し難きも受ることなく、さることあり、一飯の恩も必酬ひへふ、一言の託も必報へ負かず。路に当ては、匹夫匹婦を視ること傷めるが如く、も其沢を蒙らざれば溝中に入るが如く、義の爲めには○萬釣の身命も塵芥の如くならんことを要すへよりも輕く、是之を公義を重んずると云。

右、事に処し人に接するの要。

弗蘭克林十二徳の註釈、真に徳を好み善を勉むる者と云べし。古聖賢障子を始め、盤の銘、勸学の文、座右の銘等、進徳の工夫至らざるなし。後の学を為す者、豈效はざるべからず。今聖慮十二徳に於て、必ず会する所あるべし。平生聖学の詣る處、臣請ふ、面あたり之を聞くことを希ふ。」

この文中にいう「十二徳の註釈^(注)」は、前後の文意から、フランクリン自身の「原書原注」（原注は各徳目の解説で、『泰西勸善訓蒙』にも引用）をさすと思われる。それを見て元田は、自分なりの「補註」を初学者のために作ったのであろう。ただ、注目すべきは、原書の徳目と元田の補註とを対比すると、単に十三徳が十二徳となっているだけでなく、その順序が殆ど入れ替わっていることである。すなわち、徳目の順番は、前者を○、後者を□で囲み示せば、①節制は①で変わらないが、②沈黙→④、③規律→⑨順序、④決断→⑤確志、⑤節約→⑩節儉、⑥勤勉→③勤労、⑦誠実→⑥、⑧正義→⑫公義、⑨中庸→⑪寧静、⑩清潔→②、⑪平靜→⑦温和、⑬謙譲→⑧に替っている。これは、元田が特に②清潔や⑦温和、⑧謙遜などの徳目を、原書よりも重視したからではないかと思われる。

註（８） 国立国会図書館憲政資料室所蔵『元田永孚関係文書』は、遺族の元田竹彦氏が大切に保管され、昭和四十年代に海後宗臣氏が全面協力して『元田永孚文書』三巻を出版された。しかし、予定の残り三巻は未刊に終り、同六十三年（一九八八）一括して同館に寄贈された由であるが、その中に漢詩は含まれていない（巨勢進氏『元田東野』〈昭和五十四年、明德出版社〉所収の漢詩も一部抄録に留まる）。文書のなかにもまだ翻刻されていない貴重なものが多い。

三 元田の「十二徳自註手録」と漢詩

この元田永孚による「弗蘭克林十二徳」への補註草稿は、前述のごとく明治五年〜八年ころに作成し修訂されたものとみられる。その際、彼が見た「原書原注」は、おそらく同四年刊の纂作麟祥訳『泰西勸善訓蒙』所引「フランクリンの訓誨……十二徳」（各々「釈して曰く」の部分が原注）と考えられる。何となれば、『訓蒙』の引く「十二徳」の訳語が元田の補註草稿と全く一致するからである（ただし、前述のごとく徳目の順番は異なる）。

しかも、元田はこの補注草稿を基にしたであろう自註手録を昭憲皇后（のち正式には皇太后）に献上している。その年次を、かなりの人々が明治八年とするが、元田自身は「還曆之記」（同十一年稿）に次のごとく明記している。

九年六月、將に奥羽諸州に巡幸有らんとす。因て帝王巡幸の大意を陳述す。……その八月／還幸に先立ち／皇后に書をよせて、宮中関雎かんしゅの和（夫婦和合の徳）を専らにして螽斯の繁榮あらんことを陳じ、上杉鷹山の女訓を手写して之を上る（上書草案、別録あり）。亦、弗蘭克林の十二徳に、自註を加へ、手録して之を上る／皇后、御歌を賜ふ。乃詩を賦して之を和し奉る。

これによれば、元田は侍講となつてから一年半後の明治九年（一八七六）、天皇が奥羽地方を巡幸された六月初めより七月中旬までの間に、皇后の御役にたてばと考へ、「上杉鷹山の女訓を手写」と共に、「弗蘭克林の十二徳に自註を加へ手録」したもの（以下「自註手録」と仮称する）を、それぞれ献上したのである。それは、前掲の「補註草稿」を修訂し清書したものと考へられる（徳目の順番、両者同一）。ただ、その献上本はどこにあるのか、まだ確認できず、その控えも「元田永孚関係文書」中に見当たらない。

けれども、「還曆之記」前掲引用の末尾に、元田の「自註手録」を御覧になった皇后から「御歌」を賜わつたとある。しかも、そこで元田が、「詩を賦して之を和し奉る」と記す漢詩は、幸い佐佐木信綱氏『昭憲皇太后御集謹解』に収録されている。⁽¹¹⁾同氏が「東野先生詩抄に十二徳詩あり。皇后の御歌に元田侍講の和し奉れる作」として掲げる十二の漢詩は、管見の限り、今では他に見ることができないから、左に引いておこう。⁽¹²⁾（漢文・漢詩に返点を付し、参考までに書き下し文を加へ、十二徳目の頭に番号①～⑫を冠する。）

○ 弗蘭克林好^ニ徳行^一、嘗^レ挾^ニ十二徳^一、書^レ于^レ壁而自誠焉。臣侍講及^レ之。皇后愛^レ之、親製^ニ国詩^一以賜^レ之。臣輒賦^ニ十二絶句^一、恭和奉。（フランクリン、徳行を好み、嘗て十二徳を挾び、壁に書いて自ら誠む。臣侍講して之

に及ぶ。皇后、之を愛^めでたまひ、親^{みずか}ら国詩〈和歌〉を製し、以て之を賜はる。臣^{すなわ}輒ち十二絶句を賦して、恭しく和し奉る。）

① 節制

一瓢飲足有^二余飲^一 春在^二梅花猶未^一 闌 多少人間行樂事 十分不^レ若^二八分安^一（一瓢の飲、足りて余飲有り。春は梅花、猶未だ闌ならざるに在り。多少の人間、行樂の事、十分なるは八分の安きに若かず。）

② 清潔

衣袂已清肌亦清 更無^三人洗^二滌中情^一 誰能一箒揮除去 屋漏到頭旧棘荆（衣袂已に清ければ、肌亦清く、更に人をして中情を洗滌すること無けん。誰か能く一に箒揮して除去せんや。屋漏れ到頭、旧棘荆なり。）

③ 勤勞

舜勞^二畎畝^一 禹勞^レ水 華氏為^レ農伯氏工 今古聖賢何事業 畢生勤勉不^レ言^レ功（舜は畎畝に勞め、禹は水に勞む。華氏は農を為し、伯氏は工なり。今古の聖賢、何事か業とせん。畢生勤勉にして功を言はず。）

④ 沈黙

厭聞^三喋々說^二文明^一 不^レ若沈潜先養誠 桃李無^レ言何減色 滿蹊光彩簇^二人行^一（喋々と文明を説くを聞くことを厭ふ。若かず沈潜し、先づ誠を養ふことを。桃李は言ふこと無くとも、何ぞ色を減ぜん。滿蹊の光彩、人行に簇れり。）

⑤ 確志

此身豈被^二利名移^一 大丈夫心涅不^レ緇 斯道縱令塞^二当世^一 榮^レ天俟^レ聖更無^レ疑（此の身は豈利名の移を被らん。大丈夫の心、涅くして緇からず。斯の道は縱令当世を塞ぐとも、天を榮しみて聖を俟ち、更に疑ふこと無し。）

⑥ 誠実

九皐鶴唳達蒼穹^一 陽意發^二生深雪中^一 天下曾無^三不^レ成理^二 至誠只在^二反吾躬^一（九皐の鶴唳、蒼穹に達し、陽意、深雪の中に發生せん。天下、曾て成らざる理無し。至誠、只反つて吾が躬に在り。）

⑦
温
和

一寸愛情可_レ断_レ金 渾_ニ為_二温意_一入_レ人深 他年堯雨舜風治 和_ニ協萬邦_一是此心（一寸の愛情も金を断ずべし。渾_すに爲_す温意_す入_る人深 他年堯雨舜風治 和_す協萬邦_す是此心）

て温意を爲し、人に入りて深し。他年、堯雨・舜風治く、万邦に和協するは、是れ此の心なり。）

⑧ 謙遜

揖讓三杯礼楽生 心能纔下物皆平 人々若有謙讓徳^一 四海何由起^二闘争^一（揖讓三杯して礼楽生ぜん、心能く纔^わかに下らば、物皆平かならん。人々若し謙讓の徳有らば、四海何に由りてか闘争を起こさんや。）

⑨
順序

滾々源泉入^レ海流　盈^レ科滙^レ壑自悠々
 浪々源泉入^レ海流　盈^レ科滙^レ壑自悠々
 料を盈^レ壑を滙^レりて、自ら悠々たり。
 怪来智者多相^{さく}鑿　故意握^{うが}苗勞不^レ休（滾々たる源泉、海に入りて流る。
 怪しみ来る智者、多く相鑿つ。故意に苗を握ぎ、勞して休まず。）

⑩ 節 儉

半絲半粒是民脂 不^レ忍^三輒充^二肉食資^一 若減^二家々一分用^一 拯^三来天下幾寒飢^一（半糸・半粒、是れ民の脂なり。たやす）
輒^二肉食の資に充てず。若し家々一分の用を減ずれば、天下の幾^{いくばく}の寒飢^{さう}を拯^{すく}ひ来らん。）

⑪
寧
靜

耳目索^レ前駐^{とど}不^レ停 唯能^レ良^レ背静^や而寧 烈風雷雨迷^二林麓^一 天外一峰自若^レ青（耳目、前を索き駐まりて停らず、
能く背に良まり静かにして寧し。烈風雷雨、林の麓に迷へど、天外の一峰、自ら青きが若し。）

⑫ 公義

三杯家釀喚隣翁^一 一椀藜羹分^二菖童^一 只此些々相恤意 大^レ之当^下与^二万黎^一同^上 (三杯の家釀に隣の翁を喚び、一椀の藜羹を菖童に分つ。只此れ些々たる相恤の意なり。之を大にして、まさに万黎と同じくすべし。)

このように元田の七言絶句は、それぞれフランクリンの十二徳と教訓をふまえて、自らの儒教的な倫理観と和漢学の知見に基づき、望ましい道徳(日常心得)を盛り込んでいる。

註 (9) たとえば、佐渡谷重信氏は本稿の「はじめに」で引いた「元田永孚は明治皇后にフランクリンの自伝を進講した」に続けて「明治八年のことである」と記される。また平川祐弘氏は、注(5)の著書で「元田はフランクリンの十二徳に自注を加えて明治八、九年ころ進講したのだろう」(七七頁)と少し曖昧な書き方をされている。しかし、八年の可能性は考え難い。

(10) 「還曆之記」(元田竹彦・海後宗臣両氏共編『元田永孚文書』第一巻、昭和四十四年、元田文書研究会) 一二四頁に「その八月、還幸」とあるのは、元田の記憶違いであって、帰路『明治丸』で横浜へ到着され東京へ還御されたのは七月二十日である(『明治天皇紀』第三卷六七三頁)。

ちなみに、この七月二十日が、昭和十五年「海の記念日」と定められ、さらに平成七年から法定祝日「海の日」となった

(拙著『国民の祝日』の由来がわかる小事典、平成十五年、PHP新書一八二頁参照)

(11) 佐佐木信綱氏『昭憲皇太后御集漢解』(大正十三年、朝日新聞社) 一〇〜一二頁。

(12) 右の佐佐木氏は、「因に云ふ、元田先生進講録に添へたる東野先生詩鈔に、十二徳詩あり。…」と断って、十二の絶句を引載しておられる。しかし、既刊の『元田先生進講録』(吉本裏編、明治四十三年、民友社)は、『論語』十一講、『書経』『周易』各二講のほか、徳富蘇峰による詳細な「緒言」と「付録 元田東野翁」(評伝)から成るが、この「東野先生詩鈔」は収録されていない。また既刊の『元田永孚文書』三卷(進講録・講義録)にも巨勢進氏『元田東野』にも、「元田永孚関係文書」(注8)未刊部分にも、この漢詩は入っていない。

なお、佐佐木氏は、フランクリンの略歴を紹介する中で、「その自叙伝中に、彼は克己反省の徳を修めて、自己を鍛錬せ

んと欲し……自ら十二徳を編み（後、一徳を加へて十三徳とす）之に小解を加へ、表に作りて、それを力行せりといふ。」（前掲書九頁）と記されているが、上述のとおり、括弧内傍点部のようなことは、事実と全く逆であつて、誤認といわざるをえない。

四 昭憲皇后による二種類の御歌

以上、元田永孚が『泰西勸善訓蒙』により知りえたであろうとみられるB・フランクリン『自伝』中の「十二徳」に關する「補註草稿」と、「自註手録」を献上した昭憲皇后の御歌に唱和した元田の「十二徳詩」を紹介してきた。

ところで、元田の「自註手録」を御覧になつて昭憲皇后が詠まれた御歌は、大小の御歌集に収められ、「右十二首、明治九年、弗蘭克林の十二徳をよませたまへる」と注記されている。⁽¹³⁾

ただ、それとは別に、ほとんど同様の「御詠歌幅」が大坂青山短期大学の歴史文学博物館に所蔵されている。これは図録をみても、昭憲皇后の御直筆と認められる。⁽¹⁴⁾しかし、この④「御詠歌幅」には、なぜか御歌が十三首ある。そのうち十二首は、㊤既刊の『御集』に対応するが、子細に較べると、半数近くに多少の違いがある（順番は同じ）。そこで、④の表現を主にして、㊤と違う用字・表現を（㊤……）の形で注記しながら濁点を加え、左に列挙しよう。

- 1 節制／花の春もみぢのあき（㊤秋）のさかづきも／ほどほどにこそく（㊤汲）まほしけれ
- 2 清潔／白妙（㊤しろたへ）のころも（㊤衣）のちりははら（㊤払）へども／うきは心のくもりなりけり
- 3 勤勞／みかかづば玉も、（㊤の）ひかり（㊤光）はいでざらむ／人のころ（㊤心）もかくこそあるべき、（㊤らし）
- 4 沈黙／過（㊤すぎ）たるは及ばざりけり／こと（㊤言）葉もあだに散らさざらん、（㊤む）
- 5 確志／人ごころかくぞあるべき（㊤かからましかば）しら（㊤白）玉の／まだま（㊤玉）は火にもや（㊤焼）か

れざりけり

6 誠実／とりどりに作（㊦つく）るかざしの花よりも（㊦もあれど）／匂ふころ（㊦心）のまことをぞ思ふ（㊦うるはしきかな）

7 温和／乱（㊦みだ）るべき折（㊦をり）をばおきてはなざくら（㊦花桜）／まづ笑（㊦ゑ）むほどをならひてし哉（㊦かな）

8 謙遜／高ねをも（㊦高山の）底に（㊦かげを）うつして山（㊦ゆく）みづの／ひく（㊦低）きにつくを心ともがな
9 順序／奥（㊦おく）ふかき道にもいはん（㊦もきはめむ）もの（㊦物）ごとの／はじめ終の（㊦本末をだに）みだれ（㊦違へ）ざりせば

10 節儉／呉竹のほどよきふしをたがへずば／すゑば（末葉）の露は（㊦も）みだれざらまし
11 寧静／事にふれ（㊦いかさまに）身はいかさまに（㊦くだくとも）くだくとも（㊦むらぎもの）／こころはゆた（㊦心は豊）になすよしもがな（㊦あるべかりけり）

12 公義／よろづ民（㊦国民を）すくはん道は（㊦も）近きより／おして遠きに（㊦及ぼさむ）行よしも哉（㊦遠きさかひに）

13 （㊦のみ、㊦なし）虚誕／はかりにし鳥の空音そらねも関の戸は／明あけ／開の懸詞／てのちこそあらはれにけれ

このように、用字（仮名か漢字）の違いはさておき、表現の修訂が5・6・8・9・11・12などに著しい。これはどちらが先か後か、簡単に決めかねる。ただ、『昭憲皇太后御集』は、歌稿が複数あつても完成された方を収めていると思われるから、少くとも13以外の十二首は、㊦が先に作られ、後で㊦に改められたものと考えられる。

それはともかく、依然として残る疑問は、㊦の13がなぜいつ詠まれたかである。それは今のところ不明というほかな

い。ただ、あえて憶測すれば、元田が『泰西勸善訓蒙』により「フランクリンの教誨」は「十二徳」として「補註草稿」も「自註手録」も作ったが、フランクリン『自伝』には元来「十三徳」あることを聞き及び（たとえば洋書担当の侍講であった加藤弘之が西村茂樹あたりから）、それを昭憲皇后に申し上げたので、十三首目の御歌を付け加えられた、というようなことがあったのではなからうか。

その場合、フランクリンの原本にある徳目「純潔」を憚り、それに代る別の徳目（④御詠歌幅では「虚誕」）を考えて説明したのではないか。もしそうであれば、13にあげる「虚誕」は、「十二徳」の6「誠実」と正反対であるから、いったん御歌に詠まれたけれども、⑨への修訂段階で削除されたのかもしれない。しかし、この憶測には裏付けがなく、⁽¹⁷⁾今後とも検討を続けたいと考えている。

ともあれ、このような徳目・教訓について「補註」「自註」を作った元田永孚は、明治天皇の信任をえて道徳教育の改善に取り組み、やがて明治二十三年（一八九〇）十月三十日下賜された「教育勅語」の成稿段階で井上毅と共に深く関与したのである。

註（13）明治神宮編刊『新輯 昭憲皇太后御集』（昭和四十年）は、宮内庁侍從職所管の『昭憲皇太后御歌全集』に収録されている二万七八二五首から四五八〇首を謹撰したもの。この十二首は、普及版『新抄 明治天皇御集 昭憲皇太后御集』（同四十二年、角川文庫）一五八―一六〇頁にも入っている。なお、注（6）に付記した小倉氏の論文によれば、明治四十五年、田村謙氏作曲「御歌十二徳」（金落堂刊）があるという。

（14）明治神宮文化館編刊『昭憲皇太后九十年録記念展―美しき明治の皇后―』図録（平成十六年）には、大阪青山短大から出品された「皇后十二徳御詠歌幅」全文を収め、「本歌幅は、皇太后より元田に下賜されたものと伝わる」と解説されている。それを同図録の「明治九年二月、皇太后より女子師範学校に下賜された色紙」みかかずば玉も鏡も何かせむ まなびの

道もかくこそあれ」(㊥3に近似、お茶の水女子大学所蔵)などと照し合わせても、御直筆と認めてよいと思われる。

(15) 十三の徳目 (Virtue) と原注の教訓 (precept) の英文と和訳を、早乙女忠氏訳『英和対訳 フランクリン自叙伝』(昭和四十一年、旺文社) 二二八〜九頁により左に抄出する(松本慎一氏訳岩波文庫本と異なる徳目の訳語を丸括弧内に示す)。

1. **TEMPERANCE**—Eat not to dullness; drink not to elevation.
1. 節制(摂生) — 頭が鈍くなるほど食べな。浮かれるほど酒を飲むな。
2. **SILENCE**—Speak not but what may benefit others or yourself; avoid trifling conversation.
2. 寡黙(沈黙) — 他人や自分に益になることのほかは口にすな。くだらぬ話は避けよ。
3. **ORDER**—Let all your things have their places; let each part of your business have its times.
3. 秩序(規律) — 自分の持物の位置を定めよ。仕事をなすに当たって時を定めよ。
4. **RESOLUTION**—Resolve to perform what you ought; perform without fail what you resolve.
4. 決断—為すべきことを実行する決心をせよ。決心したことは必ず実行せよ。
5. **FRUGALITY**—Make no expense but to do good to others or yourself; i.e. waste nothing.
5. 儉約(節約) — 他人や自分の益にならぬことに金を使うな。つまり浪費は止めよ。
6. **INDUSTRY**—Lose no time; be always employed in something useful; cut off all unnecessary actions.
6. 勤勉—時間を無駄にするな。常に有益な仕事に従え。不必要な行動は止めよ。
7. **SINCERITY**—Use no hurtful deceit; think innocently and justly and, if you speak, speak accordingly.
7. 誠意(誠実) — 人をそこなうような策略を弄するな。邪念を捨て、正しい物の考え方をせよ。口を開く時も同様である。と知れ。
8. **JUSTICE**—Wrong none by doing injuries, or omitting the benefits that are your duty.
8. 正義—他人を不当に遇するな。無礼を行わず、与えるべき便宜は人に与えよ。
9. **MODERATION**—Avoid extremes; for bear resenting injuries so much as you think they deserve.
9. 中庸—極端を避けよ。不法を受け憤りに価すると思えても、過度に憤るな。
10. **CLEANLINESS**—Tolerate no uncleanness in body, clothes, or habitation.

10. 清潔—身体・衣服・住居の不潔を許すな。

11. TRANQUILITY—Be not disturbed at trifles, or at accidents common or unavoidable.

11. 平静—小事・日常茶飯事・また不可避の事故に心を騒すな。

12. CHASTITY—Rarely use venery, never to dullness, weakness, or injury of your own or another's peace or reputation.

12. 純潔—性愛におぼれて遅鈍または虚弱に陥らぬよう、自他の平和と名誉を損なわぬよう心せよ。

13. HUMILITY—Imitate Jesus and Socrates.

13. 謙譲—イエスとソクラテスをまねよ。

(16) 松本慎一氏の解説によれば、「本書が青年教養の好著である関係から、往々部分的に省略を施したものが少くない。…一九〇一年のマクミラン版の自伝も情事（純潔）の記述はそれを省略している」（注33〇四頁）。同氏の初版（昭和十二年）でも「純潔に添えてある戒律（教訓）」を訳出していないが、西川正身氏の改訳版（同三十一年）には、もちろん補訳されている（一三七〜八頁）。

(17) 佐渡谷重信氏は「明治皇后が感化を受けたのは、十三の徳目である。つまり、節制、沈黙、順序、確志、節約、勤労、誠実、公義、温和、清潔、沈着、潔白、謙遜の十三の徳目であり、これにもとづいた和歌を発表している」（注2二七頁）と記されるが、その根拠を示しておられない。

なお、「純潔」の代わりに「虚誕」について詠まれた御歌の「鳥の空音」「関の戸」は、『史記』孟嘗君伝にみる故事に由来する。また『後拾遺和歌集』に収められ『百人一首』にも選ばれている清少納言の「夜をこめて鳥のそらねははかるとも夜に逢坂の関はゆるさじ」も、昭憲皇后は当然熟知しておられたから、それをふまえて④13を詠まれたものと想われる。

（平成二十一年十月十日稿、同三十日訂）

〈付記〉 全般来、本稿関係の資料収集に際して、モラロジー研究所の橋本富太郎氏、および明治神宮国際神道文化研究所の打越高明氏から協力をえたことに、感謝の意を表する。